

妙法蓮華經の徳あらあら申し開くべし。毒藥変じて藥となる。妙法蓮華經の五字は悪変じて善となる。玉泉と申す泉は石を玉となす。此の五字は凡夫を仏となす。されば過去の慈父尊靈は存生に南無妙法蓮華經と唱へしかば即身成仏の人なり。石変じて玉と成るが如し。孝養の至極と申し候なり。

(一四九二頁)

本抄は弘安三年（一二八〇）八月十四日、日蓮大聖人が御歳五十九歳の時、身延で認められて、駿河国庵原郡内房（静岡県富士宮市内房）に住む内房女房に与えられた御消息であります。報中臣某女書とも、その内容から白馬白鳥御書ともいわれているのであります。

本抄を賜つた内房女房殿は、正式には中臣氏という立派な氏姓を持つ家柄です。

この中臣氏は、古来からの有力な氏族で、藤原氏もここから出ています。そしてこの中臣氏は政権を担うこととなつた藤原氏とは道を異にし、本来の神祇祭祀を司ぐる神官の家として誇つてきました。しかし、内房家は旧来の邪宗を捨てて大聖人様に帰依し、父親をも立派に靈山浄土へと送つた様子が、本抄からも伺うことができます。なお、御真蹟は現存しません。

初めに、大聖人様は内房女房からの書状と願文の文を引かれて本抄を認められます。その書状によりますと、八月九日が内房女房の父親の百箇日忌にあたり、その御布施料とともに亡父供養の願文を大聖人に捧げたことが伺えます。そして、内房女房は父親が亡くなる三十日ほど前に、はるばる身延へ参詣して大聖人様から直接妙法の題名を受け」でいるのであります。妙法の題名を受けたとは、一緒に題目を唱えていただいた」ということでしようか、あるいは御本尊を授与されたという事かもしません。

又、その願文には、亡父の百日忌にあたって、法華經一部並びに「方便」、「寿量」の両品を読誦するとともに「妙法蓮華經の題名」すなわち題目を五万遍唱えて、亡父の成仏を願つたとの事であります。そこで大聖人様、それに応える形で筆を運ばれています。そして、過去に法華經の読誦、あるいは一一遍の唱題が行われ、所願成就したことはあるが、五万遍もの唱題は例がないとして称嘆され、その功德の大きさを御指南なされているのであります。

そして次に、南岳大師や天台大師等が題目を唱えていた事実を示され、華嚴經、阿含經等の一切經は法華經の所從、眷属であり法華經こそが諸經の王であることを論証されています。さらに、「諸經の王」とは「天・地・人」を貫く意義のあることを示され、この「王」を蔑ろにするところに、秩序が乱れ、勝劣が混乱し、亡國となる」ことを示されているのであります。特に仏教において華嚴宗や真言宗、あるいは念佛宗や禅宗等の人々が法華經を信ぜず、怨敵となつてしていることがすべての下剋上、背上向、破上下乱の元であることを喝破せられています。

さらに、邪宗教の家に生まれてきた人は、いかに正直にして持戒尊貴であつたとしても、また智慧において勝れているとは言つても、根本が下剋上、謗法の思想に立つてゐる故に、正しく世間を治めることができないばかりか、墮地獄は免れないことを御教示なされているのであります。

しかして、法華經は惡を変じて善となし、凡夫を仏とする功德があることを示され、女房殿の孝養を称嘆されているのです。

続いて、輪陀王の故事を挙げられていますが、すなわち、輪陀王は白馬の鳴き声を聞いて力を増し、この白馬は白鳥を見て鳴くと云われていますが、王の惡政のためか、過去の惡業のゆえか、白鳥が姿を消したために白馬が鳴かなくなり、王の力は衰えました。そこで王は、白馬を鳴かせるために外道と仏法に祈願をさせ、白鳥を鳴かせた方を信じ、もう一方を我が國に失うべしとの勅宣ちよくせんを下しました。そこで一切の外道が集まり祈願をしましたが、白馬を鳴かせることはできませんでした。

その時、馬鳴菩薩が現れ、十方の諸仏に祈願したところ、たちまち白鳥が現れ、白馬が鳴き、王の力は再び勢いを増しました。王は勅宣のごとく、一切の外道の寺を仏寺としたということです。

そして、今の日本国も同じであると申され、これまでの宗教の流れを振り返りつつ、最終的には伝教大師が、法華經こそ國家鎮護ちんごの三部經と決定したにもかかわらず、弘法・慈観・智証等が邪智をもつてこれを覆くつがえし、真言の惡法を用いたことにより、亡国・墮地獄の道を開くことになつてしまつたことを指摘さしつけされているのです。

最後に、氏女の慈父は、輪陀王の如し、氏女は馬鳴菩薩の如し。白鳥は法華經の如し、白馬は日蓮が如し」と示され、女房殿の強盛な信心によつて父親を供養することができたことは、最高の孝養であつたと称嘆され、本抄を結ばれているのであります。されば、本抄に於いては四項目に亘つて信心修行の大事な事を内房女房殿に御指南になつておられますので述べてみますと、

第一に、内房女房殿の父親に対する篤い孝養心と報恩の姿を示されています。

女房殿の願文には、先考の幽靈生存の時、弟子遙かに千里の山河を陵ぎ、親のあたり妙法の題名を受け、然る後三十日を経ずして永く一生の終はりを告ぐ」とあり、父親が病床にあつた時に、わざわざ山河を越えて身延の大聖人様のもとへ参詣し、病氣平癒等の御祈念をしていただき、亡くなつた後は『自我偈』だけでも三百回、一日平均して三回も読誦しています。親を思う一途な気持ちと報恩感謝の気持ちが、私たちにもひしひしと伝わってきます。

人が真剣に信仰に励むようになるきっかけは様々ですが、家族の病氣や死去などもその一つです。普段はあまり考えたりしない人間の生死という根本問題に直面するからなのでしょうか。私たちも普段から我が身の生死を見据えると共に、他の生死についても思いを馳せ、折伏に当たっては、今を逃してこの人を救う機会はないと心得て、真剣に折伏を実行してまいりましょう。

## 第二に、題目の功德についてです。

大聖人様は、「一切の諸法に亘りて名字あり。其の名字皆其の体徳を顯はせし事なり」と御教示されています。例えば、「日本」という一字にその国土の広さも産業も経済も人畜もすべてが納まつてゐるよう、妙法蓮華經という題目には法華經一部八卷二十八品はもとより、一切經の功德が具わつてゐることを御教示あそばされてゐるのであります。

もとより、大聖人様の仰せられてゐる題目は文底秘沈の大法であつて、天台・伝教等の唱えられた題目とは違います。しかし、題目にすべての功德が具わつてゐるという道理は、天台大師や伝教大師等が説かれたとおりです。

私たちは、その上に立つて、文義意の中には「意」の法華經、広略要の中には「要」の題目、種熟脱の中には「下種」の妙法」こそが、末法今時の大聖人様の仏法であり自行化他にわたる題目であることを確信して、しつかりと唱題行に励んでまいりましょう。

第三に、諸經の王たる法華經に背くことが、亡國・墮地獄の根本原因であることです。「王」とは、天の主、地の主、人の主ということであり、天地の理に則り人を治める徳をもつてゐるのです。その徳をもつ国王を蔑ろにし、また背くことをすれば、国が亡ぶのは当然です。それと同じように、仏法にも浅深、次第があつて、一切の功德と道理は法華經にあるのですから、この法華經に背けば墮地獄の原因となるのは当然です。たとえ世間的に有能な人であつても、真に尊いものを知らなければ人を救うどころか、かえつて不幸にしてしまいます。

すなわち「自我偈」に、「不聞三宝名」（法華經 四四一頁）と示されるように、罪障の深い人は真の三宝を知らないのです。

私たちは、大聖人様が末法の御本仏であることを深く挙し、またそのすべてが「三大秘法總在の本門戒壇の大御本尊」として顯され、そしてそれが「唯授一人の血脉」によつて代々の御法主上人猊下に相伝されていることを知らなければなりません。それ故に私たちは、この「道理・筋道」をしつかり肚（はら）に入れて、正法外護と広宣流布」に邁進していくことが大切です。

第四に、善知識に巡り合うことの大切さです。輪陀王の故事にも見られるように、私たちは知らず知らずのうちに謗法を犯していたり、また過去の宿業によつて様々な苦難に見舞われることがあります。その時、私たちの救いの鍵となるのが善知識としての正法を持つ僧侶であつたり、親・兄弟であつたり、また友人・知人であつたりします。その折伏によつて御本尊様に縁し、我が身の信力・行力によつて仏力・法力とが合して悪業を消滅することができるのでです。

そこを信解すれば、今度は私たち一人ひとりが、一切衆生の善知識として折伏をしていかなければならぬこともよく判ります。大聖人様は「宋穀御書」（御書一二四二頁）に、「其の國の仏法は貴辺にまかせたてまつり候ぞ。仏種は縁に従つて起くる、是の故

に「乗を説ぐなるべし」と仰せです。良き仏の使いとして、一切衆生を折伏してまいりましょう。

拝讀の御文には「毒薬変じて薬となる」とあり、妙法の功德を「変毒為薬」と示されています。衆生の命は、本来、貪瞋癡などの煩惱に覆われており、これによつて煩惱の人生を送らなければなりませんが、この煩惱を断することなくそのまま悟りの境界へと変えていけるのが、妙法の力用です。このことを大聖人は、始聞仏乗義（一一〇八頁）に「毒と云ふは何物ぞ、我等が煩惱・業・苦の三道なり。薬とは何物ぞ、法身・般若・解脱なり。龍以毒為藥」とは何物ぞ、三道を変じて三徳と為すのみ」と仰せられています。ただし、この功德は、当體義抄（六九四頁）に「正直に方便を捨て但法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる」とありますように、「一切の執着・謗法を捨てて、正法たる南無妙法蓮華經を受持信行するところにある」ということです。この信心を、疑いを持たず強盛に実践するならば、いかなる苦難にも翻弄されず、力強く堂々と人生を切り開いていけるのです。

總本山第六十六世日達上人は、内房の女房は、この南無妙法蓮華經、大聖人様を自分の父のために紹介したものである。今あなた方が折伏して間違つた人を折伏してお寺に来ることは、大聖人様を紹介してあげている、その大聖人さまのお題目でその人々は救われる（中略）説く人も説かれる人も共に即身成仏の本懐を遂げるのが南無妙法蓮華經の大きな功德（達全二一一一五二四）と御指南され、折伏こそ最善の孝養であり、自他共に成仏する最高の仏道修行であると教えられています。

私達が折伏を実践する際、「自分は悩みを抱えている」「難しい教義を知らない」等の心配は無用です。私達に必要なのは、「必ず幸せになれる」との御本尊への絶対の確信と、相手の幸せを心から願える慈悲、そして行動する力です。これらが揃つたとき、自然と道筋が示されるのです。本日参詣の皆さん、勇気を持って立ち上がり、一人でも多くの方を寺院にお連れして、折伏を進めてまいりましょう。

日如上人猊下は折伏をすると、折伏された人が幸せになります。同時に、折伏した人も幸せになれるのです。過去遠々劫の様々な罪障、これが折伏によつてみんな消えていくのです。折伏によつて人を救うということは、「仏様のなされること」を、今、我々が仰せつかつて行つているのですから（中略）このことにはすばらしい功德がありまして、折伏によつて多くの人達を救うことは即、自分自身の過去遠々劫の罪障を消滅していくことになるのであります。大日蓮・平成二十四年五月号）と御指南になつておられます。

本年も早やお会式の季節となりました。大聖人様の御化導は「立正安國論に始まり立正安國論に終わる」と言われるよう、「一切衆生救濟のため、破邪顯正の折伏を貫かれたものでした。九月には「折伏強化月間」としての活動を行いましたが、折伏がこれで終わつたわけではありません。意義あるこの十月、私達は大聖人の広宣流布の大願を決して忘れることなく、御法主上人の御指南のまま、広布実現を目指して折伏を実践し、大聖人への真の御報恩を尽くしてまいろうではありませんか。以上。